7つの世界

kobayuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
７つの世界

【Ｎコード】
Ｎ０８０５Ｑ

【作者名】
ｋｏｂａｙｕｋｉ

【あらすじ】
ごく平凡な学生の主人公だったが、同じクラスに２人の転校生が来る。その２人は神界と魔界からの女子だった。
主人公はある日強力な３つの力を手に入れた。
そこから、人生が急展開した・・・
さぁ・・・主人公とその仲間達はどうなっていくのか・・・・・・・・

あらすじ

あらすじ

まず、このストーリーは7つの世界で繰り広げられる話である。
早速、7つの世界を紹介しよう
？　神界（しんかい）
ここでは、神族（しんぞく）というものが暮らす世界。
？　魔界（まかい）
ここでは、魔族（まぞく）というものが暮らす世界。
？　人間界（にんげんかい）
ここでは、人間というものが暮らす世界。
？　精霊界（せいれいかい）
ここでは、精霊というものが暮らす世界。
？　悪魔界（あくまかい）
ここでは、悪魔というものが暮らす世界。
？　亡界（ぼうかい）
ここでは、死んだものが暮らす世界。
４０年間いなければならない。４０年以降は１５年は自由だが
１６年目で、天界に行かなければならない
？　天界（てんかい）
ここでは、亡界で４０～５５年いたものが
暮らしている世界。
基本的に自由だが、１５０年いたら、
生き返れる。
ただし、記憶はリセットされる。

この7つの世界で繰り広げられる
色々なことに主人公達が立ち向かっていく。

主人公は、どうなるのか・・・・・・。

あらすじ（後書き）

だんだんと面白くなっていくつもりです。
楽しみにしていてください

あらすじ　パート2（前書き）

あらすじと言うより登場人物紹介です。

あらすじ　パート2

登場人物（長所を紹介）

川原（かわはら）　優（ゆう）
　とても優しく、結構イケメン　運動神経がいい。
　幼いころに身内が全員原因不明の病気で亡くなってる。
そのため、家族や親戚は一人もいない。
白恋（はくれん）　桜（さくら）
　とても優しく、家事もできる。頭がいい。
　川原優の幼なじみで一緒に住んでいる。
お父さんは大企業の社長で、お母さんはそこの秘書である。
そのため、親はほとんど帰ってこない。
雷鳴（らいめい）　慶太（けいた）
　川原優の友達。頭は良いが重度の女好き。
梅田（うめだ）　花蓮（かれん）
　白恋桜の友達で、頭が悪いが、いろんな噂を知っている。

ライ・エイ
　神王の娘　元気で活発
メイ・ウリン
　魔王の娘　礼儀正しい
ツボミ
　とても優しい
神王（しんおう）
　神界の王様　とても愉快
魔王（まおう）
　魔界の王様　とても紳士的
村原（むらはら）　藍（あい）

学力・運動ともに万能

精霊

	呼び方	
ホト：火の精霊	「師匠」	攻撃系
ウタ：水の精霊	「師匠」	攻撃系
ツダ：雷の精霊	「マスター」	攻撃系
フウ：風の精霊	「師匠」	防御系
ソウ：土の精霊	「師匠」	防御系
ロウ：岩の精霊	「マスター」	防御系
ラト：光の精霊	「マスター」	回復系
リク：緑の精霊	「マスター」	回復系

などなど

この紹介した人、中心でストーリーが始まる。

あらすじ　パート2（後書き）

次からやっと本編に入らせていただきます。
楽しみにしていてください

始まり（前書き）

本編第1話です。

始まり

桜「おきてよ～～～優君」
優「おはよう」
桜「おはよう。ご飯できてるから、早く着替えて下に来てよ」
優「いつも悪いね。ホントに僕が手伝わなくて良いの？？」
桜「私が家事しちゃ、だめですか」
桜は、上目遣いで、涙目でいった。
優「いやいや、そんなことないから本当にないから」
桜「よかった。」
桜は笑顔になり下にいった。
桜は本当に優しくてかわいいしもてるのもわかるな
俺は何てこと考えてるんだ。
そして学校の玄関
慶太「あついな、朝からふたりで登校か」
おいおい笑顔だけど目が怖いぞ
優「そんなんじゃないって」
桜「そうですよ」
花蓮「おっは～今日も二人で登校か。青春だね」
桜「だから～～」
優「やばい遅刻するぞ早く行こうぜ」
慶太「ぎりぎりセーフ」
優・桜・花蓮「よかった」
クラスメイトA「転校生が来るらしいじゃん」
クラスメイトB「くるらしいな二人も」
クラスメイトC「しかも美少女らしいな」
クラスメイトA「たのしみだな」
慶太「それは楽しみだな」
優「別に俺は興味ないね」

慶太「お前には桜ちゃんがいるからな」
ガラガラ
ここで先生がきてしまった。
慶太・優・桜・花蓮「やばい」

始まり（後書き）

どうでしたか？
結構がんばったんですけど・・・・
良かったら感想ください

出会い

先生「みんないるな、今日は転校生を紹介する。
お～い入って来い」
ガラガラ
男子「お～～かわいい」
女子「なんだ男子じゃないんだ」
エイ「はじめまして、ライ・エイです
神界から着ました。よろしく」
ウリン「はじめまして、私はメイ・ウリンです。
魔界から着ました。よろしくお願いします」
先生「空いてる席に座ってくれ」
先生「じゃぁ授業始めるぞ」
何もない1日だと思っていたが放課後とんでもないことが起こることを
優はまだ知るわけがなかった。
優「桜そろそろ帰るか」
桜「ごめん。今日は藍先輩と買い物だから」
藍先輩とは村原藍で中3の先輩である。
優「いいよ。別に気をつけてな」
桜「ありがとう」
エイ「はじめまして、優君」
ウリン「はじめまして、優殿」
優「はじめまして」
やっぱりかわいいな
俺は何考えてるんだ
エイ「どうしたの？」
優「別になんでもないよ。何か話しでもあるの」
そういうと二人は顔を赤らめて

ウリン「ちょっと、えっと」
エイ「うん、あのね」
エイ・ウリン「私たちと・・・・・・・
結婚してください」
優「えっ・・・・・・・・・・・」

出会い（後書き）

話が急展開でスイマセン

動揺

優「えーーーーーーー」
周りにいた男子「なーーーーにーーーー」
慶太「何でこいつなんだ・・・・なぜだーーーーー」
エイ「5年前一回あったよね」
ウリン「私もそのとき・・・・」
エイ・ウリン「好きになったんです」
優「ごめんね、3年前以前の記憶ないんだ・・・・・・・」
エイ・ウリン「えっ」
エイ「何で記憶ないの」
ウリン「失礼だよ」
エイ「あっ」
優「良いよ。君たちなら　3人だけで公園いこうか」
エイ・ウリン「はい・・・・・・」
優「慶太は来るなよ・・・・」
慶太「わかってるよ。俺だって空気ぐらい読めるわ」
優「ありがとう」
慶太「じゃあな」
優「あぁ」
慶太は優と別れて走っていた。
慶太「やべぇよ。優はあの事はなすと・・・・
　　早く桜を呼ばないと」
慶太「桜〜〜さくら〜〜」
桜「何??そんなに急いでどうしたの??」
慶太「はっ・・・・はっ・・・・・
　　それが・・・・優が・・・・あのことを」
　慶太は息を切らしながら、苦しそうに言った。
桜「えっもしかして・・・・・・

優君どこにいるの」
慶太「あの公園に・・・・・・」
桜「はやく・・・・いかないと」
桜は慶太を置いて走って行ってしまった。
桜「・・・・優君・・・・・・・・」

動揺（後書き）

優の過去があきらかに・・・・

思い

優「さぁ、まずそっちから話してもらおう」
エイ「話すって・・・・・？」
ウリン「なにを？」
優は顔を赤くさせながら
優「それは・・・・・僕を好きになった理由だよ」
エイ・ウリン「えっそれは」
エイ「まず私から話すよう」
エイ「私が・・その・・優君のことを・・好きになった理由は・・・・・

それは5年前、人間界に来たときに、私がみんなからはぐれちゃったときに
そのうちみんなが戻ってくると信じてたから一人で遊んでたの・・
でも夕方になっても、誰も来なかった・・・・。寂しくて泣いてたの
一人で1時間ぐらい泣いてたら、一人の男の子が一緒に探してくれたの
それでも見つからなかった・・・
でもその男の子は親が来るまで話したり、遊んだりしてくれたの
その男の子が、川原優君なの」
ウリン「私もエイさんとほとんど同じ理由です」
二人ともかおを真っ赤にさせていた。
優「へぇ～そうなんだ。なんかはずかしいね。
今度は僕の番だね・・・・・・。」
少し間をあけて優は話始めた。
優「俺が・・・・記憶を・・・・・なくした・・・・・・

理由は・・・・・・・」
言い出そうとした瞬間
桜「優君・・・・・ホントに・・・・言ってもいいの」
息苦しそうに言った
優「しょうがないだろ・・俺のためにここまで来たんだから」
桜「そうかもしれないけど　せっかく元気になったのに　また・・・・
」
優「もう大丈夫だよ。しかも今は一人じゃないし」
桜「なら私が話すよ。その方がいいでしょ」
優「でも・・・・・お願いするよ」
桜「わかった・・・・・・。」

思い（後書き）

優は優しいですね
次話こそほんとうに・・・

記憶喪失前

桜「3年前、優君の家で身内が全員、来てたとき
運悪く・・そのとき悪魔がきて身内全員殺して行ったの
そのショックで倒れて記憶喪失になったわけなの・・・
それで幼馴染の私と一緒にすんでいるの」
エイ「そんなことがあったの・・・」
ウリン「ご、ごめんなさい」
優「別にいいよ」
優は笑顔で言っているが、無理しているのがバレバレである。
エイ「そんなこと、知らなくて本当にごめんなさい。
でも、私の気持ちは変わらないよ・・・・。」
ウリン「そうです。いくらつらいことがあっても、私たちが
癒して差し上げます・・・・・。」
エイ・ウリン「だから・・・・
私たちと結婚してください。」
桜「結婚って？？？？？
えぇーーーーーーーーーーー」
優「まいったな・・・・。
今は、答えは出せないや・・ごめんね。」
エイ・ウリン「待ってますから」
桜「ちょっと・・まってよ。転校してきたばかりなのに
もう好きになったの・・・・？。
ウリン「いいえ。私たちは・・・・・。」
エイ「5年前から、ずっと・・・・・。」
エイ・ウリン「・・好きでした・・・・。」
桜「へぇ〜〜〜〜〜。」
沈黙が続く・・・・・・・・・・・
優「エイちゃんとウリンちゃんは、家どこにあるの？」

エイ「それは・・・・・。」
ウリン「優君の隣です。」
優・桜「なに～～～～～～」
エイ・ウリン「これからよろしくお願いします。」

記憶喪失前（後書き）

一途ですね
次あたりで桜の気持ちが明らかになります

一夫多妻！？

そして、４人で家に向かっている途中
沈黙が続き、気まずい状況。
沈黙を破ったのは桜だった。
桜「今日はこの後暇ですか？
　もしよければ、一緒に私の家で食べませんか？」
エイ「私はいいよ」
ウリン「私もいいですよ」
桜「久しぶりに大人数で食べますね」
優「本当に久しぶりだな・・・・・・・・・
　あっそれより、お父さんってどんな人なの？」
エイ「だから私のお父さんは神界の王様だって」
ウリン「私のお父さんは魔界の王様です。」
優「そうだったね。ごめん」
桜「そうだったんだ。・・・・・・・・・
　ってえぇ＜――――――――」
優「桜そんな声出してどうした？」
桜「優君は神様にも魔王様にもなれるんだよ。
　驚くでしょ。」
優「そっか。気づかなかった」
ウリン「優殿さえ良ければ・・・・・。」
エイ「私たち二人もらって欲しいんだけど」
優「じゃ、俺は神界と魔界両方の王様になれるということか」
エイ・ウリン「はい」
桜「一夫多妻制って言うこと？？
　でもそれじゃ・・・・・」
優「確かにちょっと抵抗はあるけど・・
　誰も悲しまなくて、すむなら・・・・・・」

桜「話している間についちゃったね。二人はお父さんたち
を呼んで来てね。」
エイ・ウリン「はい」
優「神王と魔王ってどういう人なんだろ??」

一夫多妻！？（後書き）

次は魔王と神王の登場です
桜の気持ちは次の次です
お楽しみに・

2人の王

エイ「ただいま」
神「お帰り、エイ　　飯は???」
エイ「今日は優君の家で食べるから行くよ」
神「おぉ、もう話したのか・・・。」
エイ「もう告白しちゃった。」
神「はやいな〜〜〜。それでなんていわれたんだ?」
エイ「まだ、返事出せないって」
神「さすが優だな」
そのころウリンの方は
ウリン「ただいま帰りました」
魔「お帰り」
ウリン「今日は優殿の家でお食事です」
魔「そうか・・・・。もう告白したのかい???」
ウリン「さすが、よくわかりましたね。
　　はい、告白してしまいましたわ」
魔「返事は・・・・どうだったんだい?」
ウリン「まだ、返答できないとのことです」
魔「さすが、優君だね。」
ウリン「さぁ、早く行きましょう。」
魔「わかった、すぐ行こう」
そして、桜の家
ピンポーン
優「俺、出るよ。桜は準備しといて。」
桜「はい。もう飲み物をテーブルに運ぶだけです。」
優「ようこそ、いらっしゃい」
神「よう、優。俺はエイの父で神王だ。よろしくな」
魔「こんばんは、私はウリンの父で魔王だ。よろしくね。」

優「こ、こちらこそよろしくお願いします。」
この二人が王様か、とても愉快で話しやすいな。
優「どうぞ。あがってください。」
４人「お邪魔しま～～す。」

ライバル

桜「こんばんは」
エイ・ウリン・神・魔「こんばんは」
優「今日の晩御飯は何？」
桜「今日はですね。ごはん・ハンバーグ・サラダ・スープです。」
神「おぉ、そりゃうまそうだな」
エイ「ハンバーグ大好き＾＾」
ウリン「私も＾＾」
魔「桜さんと言ったかな？」
桜「はい、そうですけど」
魔「桜さんは優君とどんな関係なのかな？」
魔王は真剣にたずねた。
神王・エイ・ウリンは、桜の顔を見る。
桜「えっ、何でそんなこと聞くんですか？」
優「そうですよ。」
魔「言っただろ。エイちゃんとウリンは優君のために来たと・・・・」
桜「はい・・。」
魔「それで桜ちゃんは一緒に住んでるでしょ。だから・・・・・・
桜「別にただの幼馴染ですよ。」
魔「本当かい？？」
桜「でも・・・・・・・・優君のことは・・好きです・・・・。」
桜は顔を赤くしながら言った。
魔「やっぱりね。強敵だね・・。」
優「桜・・・・そうだったのか。」
エイ・ウリン「・・・・・・・・・・・・えぇーーーー」
桜「・・・・・・・・・」
優「そろそろ食べようか、冷めるといけないし。」
みんな席に着き、夕食を食べ始めた。

神「おぉーこれうめぇな。でも、エイの料理も結構うまいぞ」
エイ「こんなおいしいの作れないよう」
ウリン・魔「おいしい・・・・・。」
桜「ありがとうございます。」
優「さすがだね。桜・・・。」
桜は顔を隠しながら「ありがとう」といった。

添い寝

夕食後、話が弾みもう時刻は１１時だった。
神「そろそろ帰るぞエイ行くぞ」
魔「私達も行きましょう。ウリン」
エイ・ウリン「はい。じゃぁね」
優「おやすみ・・・
　みんな帰ったね。そろそろ僕たちも寝るか」
桜「スースースー」
優「気持ちよさそうに寝てるな。部屋まで運んで行こう。」
優は桜をお姫様抱っこして部屋まで運んで行った。
優「部屋に戻るか」
桜「ゆうくん」
優「えっ・・・・寝言か・・・。ってなんで襟つかんでんだよ」
桜「スースースー」
優「しょうがないな一緒に寝てやるか
　でも桜かわいいな・・・・。
　おっとイカンイカン俺は・・・・」
一緒に寝て、そして翌朝
桜「もう、朝かそろそろ朝食の準備しないと
　えっ？？？？？何でここに優君が・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
優「ん、もう朝か・・・。おはよう」
桜「おはようございます。じゃなくて・・・なんでここで寝てるんですか。」
優「・・・・・・・べ、別に襲ったわけじゃなくて・・・。」
桜「何ですか・・・・」
優「えっと、そのえ～と　桜の寝顔があまりにもかわいかったから」
優は真っ赤な顔にして大声で言い切った。

桜「優君・・・・・・。」
桜は言ってる意味がだんだんわかってきて顔を
真っ赤にさせた
優・桜「・・・・・・・・・・・・・・」
桜「そろそろご飯にしますね」
優「はい」

ヤキモチ

優「ご飯、おいしいね。」
沈黙を破ったのは優だった。
桜「あ、ありがとう・・。」
優「そろそろ学校行くか」
桜「はい」
エイ「おはよう。優君、桜ちゃん」
ウリン「おはようございます。優殿、桜さん」
優「おはよう。二人とも」
桜「おはようございます」
エイ「どうしたの？桜ちゃん顔真っ赤だよ」
ウリン「どうされたのですか」
桜「えっ別になんでもないですよ」
ウリン「優殿何か知りませんか」
優「えっ・・し、知らないな」
エイ・ウリン「私たちに教えられないんですか??」
優「えっそれは・・・・・」
エイとウリンは、今にも泣きそうな顔をした。
優「わかったよ。話せばいいんだろ」
エイ・ウリン「はい」
優「まぁ、ただ一緒に寝ただけだよ。」
エイ「えぇーいいな。桜ちゃんいいな」
ウリン「ずるいです桜さん」
桜「別に・・・そんな・・・・」
エイ「今度私とも一緒に寝てよう」
ウリン「そうですよ。私とも寝てください」
優「それは・・ちょっと。」
エイ「桜ちゃんとは一緒に寝れるのに私とは寝れないんだぁ」

ウリン「桜さんは特別なんですね・・・・。」
優「そんなことないよ・・・・・・・わかったよ
今度一緒に寝てあげるよ。」
エイ・ウリン「やったぁーーーーー^^」
桜「えぇーーそんな〜〜〜」

嫉妬

エイ「やった・・。優君と寝れる」
ウリン「うれしいばかりです」
優「おいそんなこと今言ったら・・・・。」
慶太「よぉぉぉぉ・・。優
なんだ朝から3人の美少女とラブラブか
あついね。君は・・・・。」
優「違う。誤解しないでくれ」
エイ・ウリン「私達は優君のお嫁さんです。＾＾」
桜「私も～～～～＾＾」
慶太「良かったな。こんなかわいい子がお嫁さんで
し・か・も・3にんも」
優「さぁ。早く行かないと遅刻しちまうぜ」
慶太「何はなし変えようとしてるんだ。」
優「べ、別にそんなことないぞ」
慶太「もう、みんな聞いてるぞ」
優「えっ」
周りの男子が鋭い目線で睨んでた。
優「やばいね～～～」
男子「やっちまえーーーーー」
優「やーーーめーーーろーー」
走り走り走りまくった。そして
男子「ちっ見失ったか。」
優「何とか逃げ切ったな。ってここどこだ～～～～」
謎の者「ここはね・・・私の家で予言の館だよ。」
優「怪しいところだな・・。まぁいいやじゃあな」
謎の者「ちょっとお待ち・・。これから戦争が起こるよ」
優「何言ってるんだ。おきるわけねぇだろ」

謎の者「起きるんだよ。もうすぐね・・君は守りたい人はいるかな」
優「まぁ、いるぜ」
謎の者「ならいい。お前に力をやろう」
優「何言ってるんだ」
謎の者「魔力と神力と精霊召喚術を・・・・・。」
優「えっ・・・。マジか
　でも・・俺ただの人間だけど・・・・」
謎の者「まぁ、気にするな」

嫉妬（後書き）

次回ついに優に力が・・・・・

魔力と神力

謎の者「ただし・・・戦争をとめてくれるならな」
優「お前がとめればいいじゃねぇか」
謎の者「私はもうじき死ぬだからお前に力をやる」
優「何で俺なんだ？ほかに人ならいっぱい」
謎の者「確かにな、でもなお前には守りたい人がたくさんいるだろ
もう、失う悲しみを味わいたくないだろ」
優「あぁ、何でそのことを・・・・。」
謎の者「わかっただろ。俺が凄いと・・」
優「あぁ、わかった。じゃその三つの力を教えてくれ」
謎の者「まず三つの力のバランスを教えよう。
魔力は攻撃や防御が得意だが回復はあまり適してない
神力は防御や回復が得意だが攻撃はあまり適してない
精霊召喚術は、自分と契約した精霊しだいで変わる
契約方法は、精霊が認めれば契約成功だ。
以上が基本的なことだが質問はあるか」
優「精霊はどこいるんだ？居場所がわからなければ
契約できないじゃないか。」
謎の者「いい質問だ。基本的には自分で探すのだが俺の精霊たち
をやろう。まぁ、精霊がお前を認めるかはお前しだいだけ
どな」
優「わかった。じゃあ、魔力と神力はどうやってくれるんだ」
謎の者「俺がお前の手を握りながら、呪文を唱えると力がお前のモ
ノになる。」
優「へぇ～じゃ早くやろうぜ」
謎の者「唱えてから、1時間で俺は死んでしまうから
魔力や神力の発動方法はしぜんとおぼえてるから心配すんな
唱え終わったら精霊を召喚しとくから契約しろ」

優「えっ・・・・。」
謎の者「じゃ、はじめるぞ。・・・〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
終わったぞ」
優「えっ。変わらないんだけど」
謎の者「それじゃ、火の玉を出したいと思ってみろ」
優「・・・・・・・ファイアーボール・・・・。おぉ、でた」
謎の者「これが魔力だ、神力は機会があったら使え、次は・・・・」

精霊

謎の者「次は精霊召喚術だ。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
よし全部の精霊が出たぞ。全員に話しかけろよ
俺は、座ってみてるから」
優「あぁ、わかった。それにしても多いな
まぁいいやあの精霊から話そう
こんにちは」
ホト「よう。俺は火の精霊だ。よろしくな
それでなんか用か？」
優「あの・・その・・僕と一緒に戦いませんか？」
ホト「えっ。いきなりかよ。まぁいいや。でも俺には師匠がいるか
らな」
優「師匠ってあそこの人？」
ホト「そうだぜ」
優「そのひとはもう死んでしまうんだ。」
ホト「何でそんなことがわかる」
優「それは・・・俺に魔力と神力をくれたから」
ホト「それって、あの呪文か・・・・。お前に力をやったのか」
優「うん・・・・・」
ホト「そうか。もう師匠はいなくなっちゃうのか。いいぜお前の精
霊になってやる
これからお前のこと師匠と呼ばせてもらうよ」
優「ありがとう^^」
ホト「これからよろしく師匠」
優「僕こそよろしくホト」

優はこんな感じで精霊たちと契約していき、
他に7体の精霊と契約し合計8体と契約した
優「みんなよろしくな。これから強くなるから・・・絶対に君たちに
負けないぐらいにね・・・」
精霊たち「さすが師匠（精霊によって呼び方いろいろ）
私達もがんばります＾＾。」
こうやって、魔力・神力・精霊召喚術の3つの力をもった優であった。
優「しまった。学校行ってないじゃん～～～～～～～～」

説教

ここは、自分のクラスのドアの前
優「あぁ、どうしよう。でも入らないと」
ガラガラ
優「遅れてすいません」
エイ「ゆう～くん、心配したよう」
ウリン「勝手にどこか行かないでくださいよ」
桜「優君、心配したんだからね」
優「本当にごめん」
優はエイ・ウリン・桜の3人に抱きつかれていた。
しかも、授業中のクラスで・・
男子「心配したんだからな」
男子のみんなが背中にものすごく力を入れて殴っていった。
慶太「心配したのはホントだからな。でも・・・ねぇ・・・。」
優の背中はおかげで真っ赤になった。
先生「今まで、どこにいたのかな??」
先生は顔は笑っていたが、目が鬼だった。
優「家に忘れ物をとりに」
先生「どんだけ時間かかってるの。今は4時間目だけど
放課後、職員室に来なさい」
優「は、はい」
男子「いい気味だ」
先生「授業始めるぞ」
そして、いろいろあったが放課後
先生から30分ぐらい説教をくらった。
優「ただいま」
桜「お帰りなさい」
夕食後、20分も説教をうけた

優「はぁ、疲れた今日は散々だったな。でも3つの力が
使えるようになったしいいや」

緊張

朝起きたら
桜「優君、大変ですよ。悪魔族が人間界、魔界、神界に攻めたそうです。」
優「大変じゃないか」
桜「学校もこの騒ぎがおさまるまで休校です」
優「よっしゃー」
ピンポーン
桜「誰かな」
優「俺が行くよ。・・・は～いどなたですか」
エイ・ウリン「おはよう」
エイ「実は私達のお父さんたち魔界と神界に帰ったんだ」
ウリン「だから家に泊めて欲しいの、もし悪魔がきても
　　私たちで守りますから。」
優「俺は別にいいけど　お～い桜
　エイちゃんとウリンちゃん当分の間家に泊めていいか」
桜「別にいいよ」
優「良いって、じゃあ上がって」
エイ・ウリン「おじゃまします」
リビングでみんなで話してる最中
優「お父さんたちが行くほど、大変なの？」
ウリン「はい、とても危険な状態です」
エイ「魔界と神界はまかせて私達は優君を守ることにしたの」
桜「そんなにやばいんですか」
優「じゃあ、何で人間界に悪魔がまだいないの？」
ウリン「悪魔の大部分は魔界と神界なので人間界はほとんど来てないです。」
エイ「でも、いつ来てもおかしくない状況だよ」

桜「これから気をつけましょう」
優「とにかく、今はニュースを見て状況をみよう」
ポチッ
アナウンサー「悪魔が1体人間界に侵入したので充分お気をつけください」
優「いきなりかよ。見なきゃよかった」
エイ「知っといた方が良かったよ」
ウリン「早速、この家にシールドをはってトラップを仕掛けましょう」
桜「お手伝いします」

初戦

ウリン「さぁ、トラップは仕掛け終わりましたわ」
エイ「じゃあ、寝よう」
桜「トラップにかかると警報が鳴るので鳴ったらリビングに集まろう」
優「わかったけど、エイとウリンはどこで寝るの？」
エイ・ウリン「私達はリビングで寝るよ」
桜「寒くないですか」
エイ「大丈夫」
ウリン「大丈夫です」
優「風とか引かないように、毛布2，3枚使いなよ」
エイ・ウリン「はい」
そして、時計の針が午前1時を鳴ったとき
うい～～～～～ういい～～～～～～ん
優「警報かリビングに行くか」
桜「怖いよう・・・・・・」
エイ「・・・・・・」
ウリン「水の矢」
悪魔「弱いな」
ウリンの攻撃はまったく効かずウリンは怪我を負った
ウリン「きゃぁぁぁぁ」
優「大丈夫か、ウリン」
ウリン「早く逃げて」
エイ「私が回復させてあげる」
ウリン「そのときに悪魔が攻撃してきたら・・・」
優「心配するな。俺が必ず守ってやる」
エイ・ウリン・桜「えっ」
悪魔「笑わせるぜ、ただの人間が

じゃいくぜ、悪魔の矢」
ウリン「危ない」
優「聖なる盾」
カキン
悪魔「何俺の悪魔の矢が効かないだと」
優「まいったか」
ウリン「優殿」

困惑

エイ「何で優君が魔力を使えるの」
ウリン「優殿その盾は・・・・。」
桜「ウリンちゃんウリンちゃん」
ウリンは意識をなくした
エイ「だめ　私の回復じゃもっと強力な回復が必要」
優「ウリン大丈夫か。　てめぇーーーー
よくもウリンを　正義の剣
どりゃ～～～～～」
悪魔「そんな簡単にやられねぇよ。悪のシールド
な、何破られた　う・・うわぁ～～～～～」
桜「優君」
エイ「ウリンちゃん。・・だめ戻らない。どうしよう」
優「心配すんな。ちょっと、どいてくれ」
エイ・桜「は、はい」
エイ「何をやるつもりなの」
優「回復さ　か・い・ふ・く」
ウリン「ん・・・あれ優殿」
エイ「えっ、すごいなんて強力なの」
ウリン「この力は神力。いったいなぜ2つの力を」
優「また明日はなすよ。きょうはもう寝よう」
エイ・ウリン・桜「はい」
桜「優君、怖いから一緒に寝て」
桜はりんごみたいな顔をしていった。
エイ「桜ちゃん。ずるいです私も」
ウリン「私も一緒に寝たいです」
優「良いよ。4人で寝るか」
エイ・ウリン・桜「はい」

エイ「Z～Z～Z～Z～」
ウリン「Z～Z～Z～Z～」
桜「Z～Z～Z～Z～」
優「みんなかわいいな・・・・・・。
Z～Z～Z～Z～Z～」

驚愕

優「おはよう」
エイ・ウリン・桜「おはようございます」
ウリン「昨日のことですが」
エイ「何で2つの力を使えるの」
桜「朝食を食べてからにしましょう」
優「そうだな」
エイ・ウリン「はい」
朝食後・・・。
優「まず、2つの力を、一緒に使うことは不可能なのか？」
ウリン「はい、基本的は一人一つが原則です。でも、たまに例外がいます」
優「そうなのか。でも俺は使えるぜ」
エイ「そうなの。しかもどちらも、強力な力です。」
桜「優君って、凄いんですか」
エイ「そうだよ。神界でも2つの力が使える人いないもん」
ウリン「魔界には、少数いるらしいですが、強力な力は使えません」
優「へぇ～。でも俺、精霊召喚術も使えるよ。」
エイ・ウリン「えぇ～～～～～～」
エイ「3つの力を使えるなんて」
ウリン「ありえません。精霊とは、何体契約しましたか」
優「8体の精霊だけど」
エイ「そんなに～～～」
ウリン「さすが、優殿凄いです。」
桜「でも今まで、そんなこと知らなかったよ」
ウリン「優殿は、魔界でも、神界でも1番強いと思います。」
エイ「こんな人がお婿さんで、うれしいな」
優「そんなことないよう～～～」

桜「私も一緒にいられて良かったです。」
エイ「これなら、悪魔界の戦争も終わらせられるかも知れない」
ウリン「そうですね。そうだ、明日にでも助けに行きましょう」
桜「はい」
優「助けに行くのはいいよ。でも、君たち3人を連れて行くことはできない
　行くと当然危険だからね。わかったね。」
エイ・ウリン・桜「えぇ～～～良いじゃん」

決意

優「確かに人は多い方がいいかもしれない」
ウリン「それなら」
優「でも、1人なら自分だけなら自分のことだけ考えてれば良いから楽でしょ・・・・。」
エイ「確かにそうだけど・・・・優君だけじゃ心配だよ」
桜「そうですよ」
ウリン「・・・・・・」
優「ウリンはわかったようだね」
ウリン「・・・・・・」
エイ「ウリンちゃん？」
ウリン「ここは優殿に任せましょう」
桜「優君が死んじゃったら、どうするの？」
ウリン「心配ですよ。でも、私達が行ったら足手まといになるだけです」
エイ「そ、そんなことないもん」
桜「そうだよ。何かできるって」
優「・・・・・・・・・」
ウリン「私だって、何かして差し上げたいです。でも・・・・・・・悪魔との戦いで、私達は優君に何かしてあげられましたか」
エイ「何もできなかったけど」
桜「・・・・」
ウリン「私の得意の攻撃もエイちゃんの回復も効かなかった。けど・・・・・・優殿の攻撃・回復は効きました」
桜「わかりました。優君、必ず帰ってきてくださいね」
エイ「桜ちゃん良いの？死んじゃうかもしれないんだよ」
桜「私達が優君を信じなくて、誰が信じてあげるの？」
エイ「そ、それは・・・・うん、そうだね。優君必ず帰ってきてよ」

優「あぁ、わかった。ウリン、どこで戦ってるんだ。」
ウリン「魔界と神界です。神界から行く方がいいです。
魔界は反撃できますが、神界は回復が得意ですから
神界から助けに行き、それで、医療チームを編成して
魔界に助けに行ってください。でも・・・
お父様と通信ができなくて・・・・。」
優「大丈夫だよ。僕がつれて帰るから・・・・・じゃあ、もう寝るね。」

出発

優「おはよう」
桜「おはようございます。」
エイ「おはよう」
ウリン「おはようございます。これが、地図です」
優「あぁ、ありがとう」

出発直前
優「じゃあ、行ってくるね」
桜・エイ・ウリン「いってらっしゃい」
3人とも、笑顔で言おうとしてるが
みんな今にも泣きそうだ。　だから・・・・
優「桜・・・心配すんな」
「エイちゃんも・・心配すんな」
「ウリンちゃんも心配すんな」
優は一人ずつ抱きしめながら言った。
3人は顔を真っ赤にしてぼんやりしてた。
優「じゃあな・・・・。」
ガチャ
優は神界に向かった。
そのころ、神界は・・・・・
神王「魔王と連絡が取れないだと・・・。
　やばいな・・・反撃ができない
　今は、このまま悪魔を食い止めろ
　そうすれば援軍が来るはずだ」
隊員「はい」
神界についた優はものすごいスピードで向かっていた
そこで優が目にしたものは、驚く光景だった。

優「神界の人たち、でかいシールド張って悪魔たちを食い止めてるだけだ
悪魔たちは必死にシールドを破ろうとがんばってる。
でも、神界の人たち疲れ始めてるな。力を使いすぎたんだろ。
じゃあ、そろそろいくか。
うおおおおおおーーーーーーーーーー」
悪魔達「誰だ」

神界の英雄

神界の隊員「誰か、来ます」
神王「悪魔の援軍じゃないと良いが・・・」
神界の隊員「一人です。」
神王「な～に～」
悪魔「なんだ敵か・・・一人じゃねぇかぶっ潰せ～～～～」
優「炎の波・・・・・」
悪魔「何、我軍の半数がやられました。」
神界の隊員「す、凄い。一人で悪魔軍の半数を倒しました。」
神王「何・・・・。何者なんだ・・・。」
悪魔「ひるむな～～～～いけ～～～～～」
優「ザコ共に用はねぇ～～～　ファイアーハリケーン」
悪魔「・・・・・・・・・」
優「もう、終わりか・・・・2回だけしか使ってないのに
　弱いな・・。」
神界の隊員「神王様・・・なんと・・・・悪魔軍・・全滅です」
神界の住人「やったぁぁーーーーー」
神王「誰なんだ」
優は神王のほうに歩いていった。
沈黙がつづく。
神王「何者だ」
沈黙を破ったのは神王だった。
優「私は・・・・・川原・・優だ」
神王「優って・・・あのエイのお婿さんになる人か・・」
優「はい・・・。それで魔界にも助けに行きたいので、医療チームを編成したいのですが」
神王「おぉ・・。さすが優だな。良いぜ」
優「ありがとうございます。でも怪我してますよ。神界の隊員が・・

」
神界の隊員「すいません。あと1日もあれば直ります」
神王「治せるものはいないのか・・・・」
神界の隊員「はい・・これ以上強力な回復は・・・・」
優「怪我している人は、みんな来てください」
全員で30人くらい、いた。
優「ヒーリング・・・・・」
神界の隊員「おぉーーーー。凄い治ってるぞ・・。ありがとうございます」

魔界へ

優「いえいえ。こんなこと気にしないでください」
神王「何で2つの力を・・・・まぁ、いいそんなことより
　　神界の住人よ・・優を神界の英雄とする」
神界の住人「ゆう・・ゆう・・・ゆう・・・・」
神界の隊員「ありがとうございます。なんとお礼をしたら良いのか」
優「お礼なんていりませんよ。困っていたら助けるのは当たり前」
神界の住人「おぉぉぉぉぉーーーーー」
神王「聞いたか、今の言葉、・・・」
神界の住人「きゃぁぁぁぁーーーー」
優「そろそろ魔界の方に助けに行かないと・・・・」
神王「でも、もう遅いから、明日の朝一でいけばいい」
優「はい・・・・。」
神王「俺のところに泊まればいいよ」
優「ありがとうございます」
神王「ちょっと、商店街でも歩いたらどうだ」
優「はい＾＾」
優は商店街に向かった。あっただけで握手を求めてきたり
サインを頼まれたり、散々だった。
優「今日は、疲れたな。明日のために寝るか」
翌朝になった。優は、まだ眠いが2度寝は我慢した。
優「おはようございます」
神界の隊員「おはようございます。医療チームの編成が終わりました
たのでそろそろ
　　出発したいのですが、だいじょうぶですか」
優「まぁ、大丈夫ですよ」
神界の隊員「そうですか。なら出発しましょう」
神王「さぁ、魔界に行って、魔王を助けてくれ　頼んだぞ」

優「はい。医療チームの方は、魔界に着いたら、悪魔が全滅するまで
決して動かないでください」
神界の隊員「了解しました」
神王「また、神界に来てくれよ。みんな待ってるから」
優「はい。また来ます」
神界の隊員「それじゃ、出発・・・」

魔界の英雄

優「さぁ、着きました。医療チームの皆さん、わかってますね
全滅するまで、動かないでください」
神界の隊員「わかりました。お気をつけて」
優「あぁ、わかってるよ。それじゃぁ行くか」
魔界の隊員「このままじゃやられます」
魔王「やばいですね。反撃はできないのですか」
魔界の隊員「反撃したいのですが、もうほとんどの人がボロボロで、シールドを張るので精一杯です」
魔王「それはやばいな」
魔界の隊員「魔王様、悪魔軍の後ろから、一人誰かやってきます」
魔王「なにっ、こちらの援軍か？」
魔界の隊員「私達は通信すらできない状態ですよ。」
魔王「あちらの援軍か・・・・」
ズド～～ン
悪魔「なんだ」
魔界の隊員「悪魔軍が半数消えました」
悪魔「だれだ・・・・。」
優「死ね・・・悪魔共・・・・・怒りの波」
悪魔「うぉぉぉぉーーーーー」
魔王「凄い・・・・・誰なんだ」
魔界の隊員「こちらにやってきます」
優「大丈夫ですか。魔界の皆さん」
魔王「きみは・・・・・優君ではないか」
優「はい。そうです」
魔界の隊員「あなたが、悪魔軍を・・・・」
優「はい、そうですよ。それより怪我してる者はこちらに来てください

神界の医療チームがすぐにきます」
魔王「じゃあ、もう神界は大丈夫なのか」
優「はい。昨日終わらせました。」
魔界の隊員「これで怪我している全員です」
優「大丈夫ですか。大怪我してるじゃないですか・・・ヒーリング」
魔界の者「うっ・・・・・治ったありがとうございます」
神界の隊員「遅れてすいません。ほら、早く回復させるぞ」

ヒーロー

神界の隊員「これで、全員です。もう怪我人はいません」
優「ありがとうございます」
魔王「優君。君はいったい何者だ・・・・。
　２つの力を使えるなんて・・・」
優「そこらへんは気にしないでください」
魔王「わかった。魔界の諸君、悪魔族との戦いもこれで終わった
　この方、川原優様のおかげで・・・」
魔界の者達「うぉぉぉぉ・・・・優・・・・優・・・・優」
魔王「ここで、魔界のヒーロー優の誕生だ」
魔界の者達「いぇーーーーーーい」
魔王「ここで、優様から一言いただこう」
優「えっ・・・・その・・・みんな・・スイマセン・・・・僕が
　もっと・・早く・・来ればよかったのに・・・」
魔界の者「そんなことないよ。優様が来なければみんな死んでたかもしれないから」
優「簡単に死んでたかも知れない、なんていってんじゃねぇよ」
魔王「えっ・・・・・」
魔界の者達「・・・・・・・・・・・・」
優「スイマセン。もう帰らせていただきます。」
魔王「・・・・・・・・ちょっと待ってくれ」
優「・・・・」
魔界の者達「スイマセン。だから、帰るなんて言わないでください」
優「僕もやることが、あるのでスイマセン。また来ます」
魔界の者「・・・・わかりました。信じて待ってます」
優「ありがとうございます」
優は、それを言い残すと歩いていってしまった。

そのころ、桜たちは・・・・・・
桜「優君は大丈夫かな・・・？」
ウリン「3日も居ないと心配ですね」
エイ「・・・・私達が信じてあげないと」
桜「そうだよね」
ウリン「私達が信じてあげないとね」
エイ「じゃあ、もう遅いから寝ようか・・・・おやすみ」

帰宅

優「やっと・・・・人間界に着いた・・」
優は、家の前にいた。
時刻は、午前2時だった。
桜「Z―Z―Z―Z―Z―」
エイ「Z―Z―Z―Z―Z―」
ウリン「Z―Z―Z―Z―Z―」
ガチャッ
優「ただいま。ッて起きてるわけないか
　眠いな・・・・俺も寝るか・・・」
優はベットに入った。
優「自分のベットはやっぱ良いな～
　Z―Z―Z―」
翌朝
エイ「おはよう」
ウリン・桜「おはようございます」
エイ「優君はまだ来ないのか」
桜「じゃあ、今日も3人分の朝食か」
優「みんな、おはよう」
エイ・ウリン・桜「えっ・・・・・・・なんで居るの・・」
優「帰ってきちゃ、悪かったか」
桜「ゆうくん」
エイ「あいたかった」
ウリン「ゆうどの」
そうやって、言うと3人は抱きついてきた。
優「お、おい・・・・。今日は久しぶりにあったからいいか
　なぁ、4人でどっかに遊びに行くか」
桜「えっ、いいの。早く行こうよ」

ウリン「うれしいです」
エイ「どこいくの？」
優「遊園地なんてどうだ」
エイ・ウリン・桜「うん」
優「朝食、食ってからな」

デート？

桜「楽しみだな・・・どんな服、着ようかな」
エイ「うれしいな・・・かわいい服着ていかなきゃ」
ウリン「いきなりなんて、この服でいいかな？」
優「今日は久しぶりに遊べるんだ。楽しむぞ」
４人はそれぞれの思いを抱いて遊園地に行くのであった。
そして、遊園地に着き
優「俺、遊園地来るの初めてなんだ」
桜「へぇ～意外だな。私もだよ」
エイ「人間界の遊園地は・・」
ウリン「初めてです」
優「まず、最初はどこに行く？」
エイ「お化け屋敷がいい～～＾＾」
ウリン「わたしも＾＾」
桜「え～、でも怖いじゃん」
優「桜、大丈夫だよ。僕がついてるから　だから一緒に行こう」
桜「うん」
そしてお化け屋敷の中
桜「きゃ～～怖いよう優君」
エイ「こわ～～～い」
ウリン「怖いです」
と言いながら、優に抱きついていった。
その後、ジェットコースターなどいろいろなものに乗って
ラストは、観覧車・・・
優「観覧車って、意外に高いんだな」
桜「そうですね」
エイ「今日は楽しかったね」
ウリン「はいそうですね」

優「また一緒にいこうな」
エイ・ウリン・桜「はい」
優「後、俺の力の事は秘密な」
エイ・ウリン・桜「はい」
そして帰宅したのであった。

登校

その後、悪魔軍が来る恐れはないとのことで今日は、久々の学校
優「おはよう。今日から学校だな」
桜「そうですね。一緒にがんばりましょう」
優「そろそろいくか。遅刻はやばいからな」
桜「そうですね」
そして、玄関・・・・・・
エイ「おはよう」
ウリン・桜「おはようございます」
優「おう、おはよう。じゃあ、行くか、久しぶりの学校に」
エイ・ウリン・桜「はい」　　学校に着いた。
慶太「よう、久しぶりだな。相変わらず、優はモテモテか」
優「だから、違うって」
慶太「ほんとか～～～？そんな事より、やばいぞ。この近くに悪魔を倒したやつが
　　いるってさ。悪魔は、結構強いはずなのに強いよな～～会ってみたいよな」
エイ、ウリン、桜、優　ギクッ
優「あぁ～～あ、会ってみたいな」
エイ・ウリン・桜「はい、そうですね」
優「やばい、遅刻するぞ・・・・走れ・・・」
エイ「間に合ったね」
桜「ホントに良かったです」
ウリン「そうですね」
慶太「先生に怒られなくてすんだ。セーフ」
先生「お～い。席に着け～」
みんな「は～い」
先生「久しぶりだな・・・休んだ分ビシビシ厳しくやって行くから

な」
みんな「えぇ～～～～」
そして、学校生活が始まった。
優「ただいま～」
神王・魔王「お帰り～～」
そして、自宅に着くと、神王と魔王がいた
新たに冒険が始まる予感がした、優であった

新生活？

優「えっ、何でここにいるの？」
神王「実は頼みがあって・・・・」
魔王「頼みます。ちょっと預かって欲しい子がいるんだけど」
優「はいっ？？？」
神王「頼むよ」
優「別にいいですけど・・・・」
魔王「ありがとう。優君」
優「いえ、別にいいですけど・・・なんで僕のところ何ですか？」
神王「それが・・・・・」
魔王「こっちの事情でね。そこのところは気にしないでくれないかい？」
優「まぁ、わかりました。その子はどこにいるんですか？」
神王「今、公園にいると思うぜ。迎えに行ってくれねぇか」
優「その子の名前は、なんていうんですか」
魔王「ツボミって言う名前だよ。それじゃあ、頼んだよ。さようなら」
神王「また、助けられたな。ありがとう。じゃあな」
優「おい、もういなくなっちゃったよ。じゃあ、迎えに行くか」
公園・・・・すると、小学4年生ぐらいの女の子がいた。
優「あの子かな・・・声かけてみるか」
ツボミ「誰？・・・・・」
優「僕は、川原優だけど・・君はツボミちゃん？」
ツボミ「そうだよ。」
優「そっか・・・なら良かった。じゃあ、家に行こうか」
ツボミ「いやだ・・・・」ツボミは泣き出した。
優「えっ、何で泣くんだよ」
ツボミ「ま、前に・・行った・・家・・で・・いじめられた・・・

から

　　また・・・いじめられるの・・・・・いや・・・・」

優「そんな事があったんだ。・・・・」

優は、優しくツボミを抱いた。

ツボミ「えっ」

優「大丈夫だよ。僕はツボミちゃんをいじめたりしないから」

ツボミ「ホントに・・・」

優「あぁ、ホントだよ」

お兄ちゃん

ツボミ「ホントに・・・」
優「ホントだよ。僕を信じて一緒に生活しよう」
ツボミ「でも、何にもできないし、迷惑かけるだけだもん」
優「いじめられた人に言われたの？」
ツボミ「うん。」
優「大丈夫だよ。僕は、ツボミちゃんが居るだけでうれしいから」
ツボミ「えっ・・・・う、うれしいな～」
優「じゃあ、行くか僕の家に・・・」
ツボミ「うん・・・・・ねぇ・・」
優「なんだい？」
ツボミ「これから、お兄ちゃんって呼んでいい？？」
優「別にいいよ・・・」
ツボミ「ありがとう・・・お兄ちゃん」
優「そういわれると照れるな」
ツボミ「優しくて、かっこいいお兄ちゃんができてうれしいな」
優「ははは・・・・」
そして、自宅に着くと・・・
桜「優君どこに行ってたんですか」
優「そんなに怒鳴らなくても、いいじゃないか」
ツボミ「うぅ・・・」
優「大丈夫だよ。このお姉ちゃんは、とっても優しいから」
ツボミ「ホントに・・・」
桜「誰なんですか？その子」
優「この子は、ツボミちゃん一緒に住む事になったけどいいよね」
桜「そうだったんですか・・」
ツボミ「お姉ちゃんは、優お兄ちゃんと付き合ってるの？」
優「何を聞いてるんだよ」

桜「・・・・付き合ってないけど、それがどうしたの？」
ツボミ「そ・れ・な・ら、お兄ちゃんは付き合ってる人いる？」
優「居ないけど・・・」
ツボミ「じゃあ、私と付き合ってよ。お兄ちゃん」
優・桜「な～に～～～～」

4人

桜「ツボミちゃん、本気なの？」
ツボミ「本気だよ」
ウリン・エイ「何ですって」
優「どっかから、聞いてたんだ」
エイ「そんなことより・・・」
ウリン「ツボミちゃん、ホントに優君の事好きなの？」
ツボミ「うん、大好きだよ。・・お姉ちゃんも優お兄ちゃんの事すきなの？」
エイ・ウリン「・・・・・・うん。大好きだよ」
ツボミ「桜お姉ちゃんも好き？・・・」
桜「・・・私も好きです。優君」
優「・・・・照れるな・・・・」
エイ・ウリン・ツボミ・桜「だれの事好きなの」
優「えっ・・・それは、まだ好きな人はいないけど、４人とも好きだよ」
エイ・ウリン・ツボミ・桜「・・・・・・」
ツボミ「まッ、いいや嫌われてないんだし」
エイ「そうだよね」
桜・ウリン「そう、そう」
優「もしかして、言葉のチョイス、ミスってた」
桜「うん」
エイ「ちょっと、ひいちゃったかも・・」
ウリン「・・・・・・・」
優「ごめん。でもみんなにはどこにも行って欲しくないから・・・
　そばにできればずっと居て欲しいから」
エイ「うれしくなっちゃうな」
桜・ウリン「そうですね」

ツボミ「もっと、好きになったよ。お兄ちゃん」
優「今の言葉、恥ずかしかったな」
エイ・ウリン・桜「あはははは・・・」
ツボミ「さすがにお腹が減ってきたんだけど・・・」
優「そうだな。そろそろ食べるか。エイちゃんもウリンちゃんも一緒にどう」
エイ「喜んで」
ウリン「ぜひ」

お願い

優「そろそろ寝るか・・」
エイ「そうだね・・じゃあ、かえるね。おやすみ」
ウリン「おやすみなさい」
桜・優・ツボミ「おやすみ」
桜「じゃあ、私達もそろそろ寝ましょう。ツボミちゃん一緒に寝ようね」
ツボミ「え～いやだ。お兄ちゃんと寝たい。いいでしょ、お兄ちゃん」
桜「えっ・・・・・・そんなの・・・だめですよ」
優「そんな泣きそうな目で見るなよ。ツボミちゃん。今日はお姉ちゃんと・・」
ツボミ「え～～ん、え～～～～ん」
優「あ～～わかったよ。一緒に寝てあげるよ。」
ツボミ「やったーー＾＾」
桜「いいな～～。ツボミちゃんだけずるいです私も一緒に寝たい」
優「分かったよ。今日は3人で寝るか・・」
桜・ツボミ「やった＾＾」
優「じゃあ、寝るか。でもこの事は誰にも言うなよ」
ツボミ・桜「は～い」
ツボミ「じゃあ、早く寝ようよ」
桜「そうね」
こうして、優は右にはツボミ、左には桜、挟まれながら寝るのであった。
桜・ツボミ「Z－Z－Z－Z－」
優「こんなかわいい子に挟まれてたら眠れないよ・・」
ツボミ「今言ったことホント？」
優「ツボミちゃん、起きてたの」

ツボミ「うん。そんな事より今言ったことホント？」
優「・・・・・・ほんとだよ」
ツボミ「うれしいな。今まで、信じられる人いなかったけどお兄ちゃんなら信じられる
　　だから、いつまでも一緒に居てね。もう、一人になりたくないから」
優「・・・当たり前じゃないか。」優はそういいながらツボミを優しく抱いた。
ツボミ「・・・・・・・・・」
桜「優君って、ロリコンだったんだ」
優「桜、今のは違う」
ツボミ「えっ、何が違うの」

学校

ツボミ「ウソだったの・・・・」
優「ウソじゃないよ」
桜「やっぱり・・・」
優「違うって、桜もツボミちゃんもかわいいよ」
桜「そ、そんな・・・・かわいいだなんて」
ツボミ「うれしいな」
優「これでいいかな？早く寝よう」
ツボミ「うん」
桜「・・・・やっぱり適当な事言ったでしょ」
優「そ、そんな事ないって」
桜「ほんとかな～～～」
優「信じてくれないのか・・・・じゃあ、これで信じてくれるだろ」
優はそう言った後、桜の頬にキスした。
桜は顔を真っ赤にさせて
桜「・・・・」
優「信じてくれる？？」
桜は頷いた。
ツボミ「いいな～～～」
優「起きてたのか！！！」
ツボミ「桜お姉ちゃんばっかりいいな～～」
優「して欲しいのか？？」
ツボミ「うん」
優は結局ツボミの頬にキスした。
ツボミ「うん。ありがとう」
優・桜・ツボミ「ｚ－ｚ－ｚ－ｚ－ｚ」
そして、翌朝
優「ツボミちゃんは、どこの学校に行くの？

桜「どうしましょうね」
優・桜「う～～～ん」
魔王「とにかく、また入れることにするよ
　　まずここの生活から慣れてもらわないと」
優「そうですね」
桜「そろそろ、学校行きましょうか」

平和

ツボミ「お兄ちゃん・・どっか行っちゃうの??」
優「うん。学校に行ってくる」
ツボミ「行かないでよ～～～」
桜「そんな無理な事言っちゃだめだよ」
ウリン・エイ「おはよう（ございます）」
優・桜「おはよう」
ツボミ「おはよう。お姉ちゃんたち聞いて、昨日いい事あったんだ」
エイ「いい事って何かな?」
ウリン「なんですか?」
ツボミ「そ～れ～は、昨日優君と一緒に寝たんだ」
エイ「いいな～～」
ウリン「でも私達も寝た事ありますよ」
ツボミ「へぇーでも優君“かわいい”って言ってくれたし頬にキスもしてくれたよ」
エイ「ずるいな」
ウリン「ずるいです。ねぇ桜さん?」
桜「それは・・・・」
ツボミ「桜ちゃんもしてもらってたよ。だから二人だけだね
　　キスしてもらってないの」
エイ「優君私にもしてよう」
ウリン「わたしにも」
優「で、でもねぇ～～～」
エイ「へぇ～～桜とツボミにはできて」
ウリン「私達にはできないんだ」
優「わかったよ」
結局、優はエイとウリンの頬にキスした。
エイ「やったぁ」

ウリン「うれしいですわ」
優「あははは」
ツボミ「ホントにお兄ちゃんはモテルね。」
桜「そろそろ、行くましょう」
ウリン・エイ「うん」
優「そうだな。ツボミちゃんおとなしく待っててね」
ツボミ「うん。早く帰ってきてね」

平和（後書き）

毎回短くてスイマセン・・
次からもうちょっとがんばります

前夜

そして、平和な日々が続き今は優達は高校2年生だった。
ツボミは中学2年生である。
関係は全然進展せず現状維持・・・・

優「授業だるいな」
ウリン「そんな事言ってはだめですよ」
桜・エイ「そうだよ」
優「じゃあ、授業は楽しいか?」
桜・ウリン・エイ「・・・・」
優「ほらな」
4人とも同じ学校に入ったのである

そして自宅・・時刻は午後10時
優「そろそろ寝るか」
桜「はい」
優「おやすみ」
桜「おやすみなさい」
ツボミ「おやすみ」
そして翌朝・・・・
桜「優君大変です」
優「どうした?」
桜「悪魔族がまた攻めてきたそうです
今度は神界と魔界だけですけど、一応当分の間休校です」
優「そうか・・・・じゃあ、俺も行くかな」
エイ「私も行く」
ウリン「私も行きます」
優「えっ・・・でも」

エイ「お願い」
ウリン「お願いします」
桜「私も・・・行きます」
ツボミ「お兄ちゃん、ツボミも連れて行って」
優「ツボミちゃんいつからそこにいたの？」
ツボミ「悪魔が攻めてきたってところかな」
優「最初から聞いていたんだね」
ツボミ「うん」
優「はぁ～～でも、君たちに危ない目にあって欲しくないからこないでくれるかな」
エイ「優君だけに」
ウリン「危ない目に」
桜「会わせるなんて」
ツボミ「いやだよ」
優「分かったよ。でも出発は明日の朝」
エイ「は～～い」
ウリン「それで、お願いがあるんですけど」
優「なんだい？」
ウリン「今日、一緒に寝てください」
優「えぇ、それは」
ウリン「だめですよね・・・・・」
優「分かったよ。その代わり必ず帰ってこよう」
ウリン「はい」
エイ「いいなぁ～～」
桜「ずるいです」
ツボミ「ツボミも」
優「はぁ、わかったみんなで寝よう」
エイ「やったぁ」
ウリン「うれしいです」
桜「ありがとうございます」

ツボミ「寝る前にはキスしてね」
優「何！！？？・・・・分かったよ」
エイ「やったぁ、優君大好き」
ウリン「エイちゃんずるい」
桜「私も」
ツボミ「お兄ちゃん」
優は４人に抱きつかれた。
優「なにしてんだよ」

精霊登場

そして翌朝
優「おはよう」
エイ「おはよう」
ツボミ「おはよう」
桜「おはようございます」
ウリン「おはようございます。ところでそろそろ行きましょう」
優「そうだな。行くか。みんな俺の言う事しっかり聞けよ」
エイ「そんなのわかってるよ」
ツボミ「早く行こう」
桜「もっと楽しく行きましょうよ」
ウリン「そうですね」
優「ふざけるな・・・・」
桜「えっ？？？？」
優「“ふざけるな”っていってんだよ。楽しくいけるわけねぇだろ
　もっと緊張感を持て、ピクニック気分じゃ死ぬぞ」
桜「すいません」
優「あっ怒鳴ってごめん・・・でもお前たちに死んで欲しくないんだ。
　もう帰っていいぞ」
桜「でも・・・」
ウリン「スイマセン」
エイ「ごめん」
ツボミ「ごめんなさい」
優「今から、行くところは戦場だ
　戦ってる場所なんだよ。そこのところ忘れるな」
桜「はい」
優「俺は先に行ってくるから、桜達はゆっくり来い」

エイ「えっでも優君が危ないよ」
ウリン「そうですよ」
ツボミ「みんなでいこうよ」
優「だめだ。俺が先行って悪魔達を倒せばお前たちは安全だろ」
桜「でも、優君が危険です」
優「俺なら大丈夫」
ウリン「ここは優君を信じましょう」
優「じゃあ、また魔界で会おう」
桜・ツボミ・ウリン・エイ「はい」
そして、優は先に魔界に向かい、４人は後から行く事になった。
エイ「優君、大丈夫かな？」
ウリン「少なくとも、私達が行くよりいいと思います」
ツボミ「なんで・・お兄ちゃんって人間なんでしょ」
桜「そうなんだけど」
ウリン「私から説明します。　〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜」
ツボミ「へぇ、お兄ちゃんって強いし優しいしかっこいいんだ」
エイ「まぁ、そういうことだね」
そのころ、先に魔界に向かった優は
優「さっきは、えらそうな事言っちゃったな・・・・・
　俺も気をつけないと　さぁ、早く魔界に行きましょう」
そして、魔界に着いた優は驚愕していた
優「なんだこれは・・・・」
魔界にシールドは張ってあるがもう破壊されそうだった。
悪魔達も前よりも１０倍の兵力で攻めてた。
魔界も反撃どころじゃなかった。
神界は攻撃したいが得意分野ではない医療チームも魔界が
囲まれているから近付けない
魔界の住民Ａ「きゃぁぁぁぁぁ」
魔界の住民Ｂ「うわぁぁぁぁぁぁ」

優「早く助けに行かないとやばそうだな・・・精霊にも手伝ってもらうか
まず魔界に行かないと・・・精霊を出すか
我と誓いし精霊よ・・今我に力を貸してくれ・・・火・水・雷の精霊よ」
優の周りが光った
ホト「呼んだみたいだな師匠」
ウタ「何かしら師匠」
ツダ「何すればいいんだマスター」
優「早速だけど、魔界まで行く道を作ってくれないか
まず魔界に入らないと話にならないからね」
ホト「わかったぜ」　ウタ「はい」　ツダ「やってやるぜ」

精霊活躍

魔界では・・・・
魔王「やばいな・・またこの状況ですか・・」
魔界の隊員「魔王様　こちらに向かってまっすぐ誰か来ています」
魔王「悪魔達はどうしてる」
魔界の隊員「そのものが歩いているところだけ悪魔達がいません」
魔王「悪魔たちの王かもしれませんね
　　そのままでいてくださいぎりぎりまで見極めましょう」
魔界の隊員「了解」
そのころ優は・・・
優「悪魔達が多いな・・・ホト・ウタ・ツダだいじょうぶか？」
ホト「師匠なめないでください」
ウタ「私達はこんなやつらに負けるほど」
ツダ「弱くないっすよ」
優「そうだね　君たちだもんね　やっと魔界が見えてきた」
魔王「もう見えてくるころか・・・・いったい何者なんだ」
魔界の隊員「来ます・・・・・・」
優「やっと着いた。じゃあ魔界に入るよ」
魔王「あれは優君じゃないか」
魔界の隊員「もしや・・・・あのヒーローですか」
魔王「そうだ」
魔界の住民「ゆう・・ゆう・・・ゆう・・・」
魔王「騒ぐな」
優「今助けに来ました。怪我人はこちらに来てください。ホト・ウタ・ツダは
　　攻撃しといて後で行くから　魔界の人はシールドを張るのを頑張って下さい
　　こちらも後で手伝います」

魔王「わかりました・・今の聞いていましたねそのとおりに動いてください」
優「我と誓いし精霊よ・・今我に力を貸してくれ・・残りの精霊達よ」
優の周りが再び光った
優「回復系の精霊はここで治療を防御系の精霊はシールドを張るのを手伝って」
精霊たち「はい」
優「魔王は神界に援軍の要請と神王を来させて」
魔王「分かりました」
優「さぁ、はんげきだぁぁぁぁ」
みんな「おぉぉぉぉ」
防御ではフウ・ソウ・ロウが手伝ってくれて
回復ではラト・リクが治療をしていた。
優は攻撃側に周りホト・ウタ・ツダと一緒に攻撃していた。
優「ファイヤー・ウェーブ」
ホト「炎の鉄拳」
ウタ「水の鉄拳」
ツダ「雷鳴の歌声」
それぞれ攻撃していくうちにもう半数になっていた。
優「ラストだ。踏ん張れ」
ホト「おぅ」ウタ「はい」ツダ「よっしゃぁー」
魔王「通信がとれてすぐ来ます」
優「わかった」
ラト「終わりました」
リク「こっちも終わったよぉ」
フウ「こっちもまだまだ」
ソウ「負けてられないね」
ロウ「踏ん張っちゃうよ」
魔界の隊員「まけるなぁ踏ん張れぇーー」

それぞれ頑張ってた
そして・・・・
優「これで終わりだ・・・炎の大針手」
悪魔達「うわぁぁぁぁぁぁくっそぉぉぉぉぉ覚えておけーーー」
優「ふぅ～～まぁ一応間に合ったな」
ホト「さすが師匠なかなかだな」
優「みんなお疲れ戻っていいよありがとう」
精霊「そんな事ないよまた呼んでください師匠(ますたー)のためにいつでもきますよ」
優「ありがとなホントにまた頼むよ」
そういうと優の周りは光って精霊たちは帰っていった
神王「優殿およびかい？」
神界の隊員「私達は負傷者や疲労者の回復に行ってきます」
優「お願いね・・・・神王と魔王さん達ここじゃ話しづらいので・・・」
魔王「分かりました。会議室があります。向かいましょう」
神王「おぅ」
優「はい」
そして会議室・・・
優「それで話なんですけど・・・・・・」

決断

優「それで話なんですけど・・・・魔界と神界を統合する事は無理でしょうか？」
神王・魔王「えっ？」
魔王「いきなりなんとおっしゃると思ったら」
神王「さすがに厳しいと思うぜ」
優「やっぱりそうですか」
魔王「なんでいきなりそんな事を思いついたんですか」
優「それは・・・」
神王「それは何だよ」
優「決定的に魔界は回復率が悪く、神界は攻撃力がなさ過ぎるからです」
魔王「確かにそうですが」
神王「でもなぁ・・・・」
優「じゃあ、神界の隊員と魔界の隊員を半分ずつ交代させればいいじゃないですか
　1ヶ月おきぐらいで・・・・そうすればどちらもいいでしょう」
魔王「確かにそうですね・・・・・・分かりました。私はいいですよ」
神王「えっ・・・確かにそれならいいかもなよっしゃ俺も参加させてもらうぜ」
優「はい・・・あとは皆さんに伝えといてください」
魔界「優君が言ってください」
神王「それがいいな。思いついたのも優殿だし・・・神界でも頼むぜ」
優「えぇぇぇ・・・分かりましたよ。魔界の住人を集めてください」
そして、演説場・・・・・
優「皆さんこんにちはさっきは遅く来てすみませんでした

そして今来てくださって本当にありがとうございます
今日は皆さんに報告に会ってお呼びしました
本題に入りますけどこれから1ヶ月交代で魔界と神界の隊員を半分交換します
これにより各界の問題点は改善されます」
魔界の住人「家族はどうするのよ・・・・1ヶ月って長すぎるんじゃない」
優「それもそうですねでも心配しないでくださいまだ分かりませんが隊員分の家を用意して
家族が住めるようにして学校や施設なども配備するつもりです。
お金はかかりますがみなさんの命を守るためにもご協力お願いします」
魔界の住民「ヒーローが言うんだから、信じるわ」
優「ありがとうございます」
魔王「今日もこの人に救われたこの優君をわが国の王として迎えたいのだがいいか？」
魔界の住民「当たり前だ言いに決まってんだろ」
魔王「それで優君どうする？」
優「えっそれは・・・・」
神王「ずるいぞ、優殿は俺の国に迎えるんだぞ」
魔王「先手必勝だよ神王君」
神王「くそっ」
優「まだ、答えは出せません今はそんな事よりこの世界を平和にする事が先決です」
魔王「えっ・・・・・・」
神王「さすが優殿だな明日神界に出発だから寝ようぜ」
優「はい」
そして翌日・・・・

決断（後書き）

すみません
短くなって・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0805q/

７つの世界

2011年1月16日03時25分発行